平成29・30年度蔵書評価報告書

平成30年11月

東京都立中央図書館資料管理課

目　次

1　目的 …… 1

2　評価テーマ及び評価範囲 …… 1

3　評価事項 …… 1

4　評価者 …… 1

5　実施日程 …… 1

6　移転後の都立多摩図書館について …… 2

7　都立図書館が実施した各種調査結果について …… 3

8　蔵書評価結果 …… 5

資料1　東京マガジンバンク雑誌分類表

資料2　都立図書館逐次刊行物独自分類表

資料3　都立図書館実施調査の概要について

資料4　平成29･30年度蔵書評価　質問事項

1　目的

平成27年度包括外部監査結果に基づく改善計画等を踏まえ、都立多摩図書館「東京マガジンバンク」資料について、外部専門家に調査、分析及び評価を依頼する。評価結果を参考として資料収集、利用者サービスの一層の充実、包括外部監査結果に基づく改善計画対応等に役立てる。

2　評価テーマ及び評価範囲

(1)テーマ　　東京マガジンバンク資料の収集及び提供方法の充実

(2)評価範囲　　東京マガジンバンクの所蔵資料に関すること

3　評価事項

(1)一般週刊誌及び総合誌の多様な収集・保存のあり方について

(2)東京マガジンバンクの重点テーマ(女性誌・鉄道誌)の収集・保存のあり方について

(3)収集資料の提示方法について(開架での配置方法の工夫等)

(4)収集の充実が望まれる分野について

4　評価者

(1)平澤　昇(ひらさわ　のぼる)氏(公益財団法人大宅壮一文庫事務局次長)

大宅壮一文庫は、一般雑誌を明治時代から現在まで 1 万種類、刊行中の雑誌では、週刊誌、女性誌、総合月刊誌など 1,000 種類を所蔵。多くのマスコミ関係者等に利用されており、雑誌の収集においては、民間で最大規模を誇っている。平澤氏は、大宅壮一文庫において約30年間勤務し、一貫して資料管理、収書、レファレンスの業務を担当してきており、雑誌閲覧サービス提供の経験等が豊富である。

(2)川井　良介(かわい　りょうすけ)氏(元東京経済大学コミュニケーション学部教授、日本出版学会顧問)

個別雑誌ではなく、雑誌メディア自体を様々な面から考察してきた。1970 年代以降、出現した大判でビジュアル性に富んだ雑誌を「現代マガジン」と命名するなど、雑誌の総合的研究を行ってきた。平成30年3月に東京経済大学コミュニケーション学部教授を退職し、現在は日本出版学会顧問を務める。主な著作として、編著『出版メデイア入門』第2版(日本評論社　平成24年)などがある。雑誌研究等のために雑誌閲覧サービスを利用した経験等が豊富である。

5　実施日程

(1)第1回【来館調査 1 回目】

平成30年2月22日(木)午後3時から午後5時まで

東京マガジンバンクの現状等の説明及び館内見学を実施した。

(2)第2回【調査報告(都立図書館が実施した調査に関する報告)】

平成30年6月29日(金)午後3時から午後5時まで

「都立図書館利用実態・満足度調査」、「雑誌の大量利用に関するアンケート及び聞き取り調査」、「都立図書館潜在利用意向調査」の調査結果に基づく報告を実施した。

(3)第3回【来館調査2回目】

平成30年7月20日(金)午前9時から正午及び午後2時から午後5時まで

(1)及び(2)を踏まえ、東京マガジンバンク資料の内容・構成・保存・提示方法等について、開架、開架書庫及び閉架書庫の詳細調査を行った。

サービス部長、多摩図書館長、資料管理課長、各担当とともに意見交換を行った。

(4)第4回【評価結果報告会】

平成30年9月6日(木)午後2時から午後5時まで

都立図書館職員に対する評価結果報告会を開催した。

6 移転後の都立多摩図書館について

(1)概要

都立多摩図書館は、施設の老朽化が進むとともに、収蔵能力の限界が近づいたことなどから、「都立多摩図書館の施設整備について」(平成23年1月)に基づき、施設及びサービスを充実し、平成29年1月29日、国分寺市に移転しオープンした。

移転前は駅から徒歩20分の距離であったが移転後は徒歩7分に短縮され、開館時間も平日は午後9時までと1時間半延長した。

「森の中の本の森」をコンセプトに、緑豊かな周辺環境との調和と環境への配慮を実現するとともに、収蔵庫及び閲覧スペースの拡大により、収蔵能力と開架資料の拡充を図った。規模は面積が2倍、収蔵可能冊数、開架冊数とも3倍、閲覧席数は1．5倍となっている。

(2)入館者数

移転前の平成27年度が 75,512 人、平成28年度4月から12月までが 37,736 人であったのに対し、移転後の平成28年度1月から3月までが 71,665 人、平成29年度が 215,706 人となった。平成27年度と平成29年度を比較すると、約2．9倍となっている。

(3)レファレンス件数

レファレンス件数は、平成27年度 9,462 件、平成28年度4-12月 2,898 件、平成28年度1-3月 5,180 件、平成29年度 21,323 件と、移転後は約2．3倍となっている。

(4)東京マガジンバンクについて

ア 概要

都立多摩図書館は、雑誌を提供する「東京マガジンバンク」と「児童・青少年資料サービス」の2つの機能を有する。

「東京マガジンバンク」は、平成21年度から雑誌の集中的サービスとして開始した。公立図書館では国内最大規模の雑誌所蔵数(和洋合わせて約 18,000 タイトル)であり、移転後は、そのうち収集継続雑誌約 6,000 タイトルを開架に配架し、開架タイトル数は11倍となっている。

重点的に収集しているのは、女性誌と鉄道誌、地域情報誌であり、創刊号コレクション約6,600タイトルも所蔵する。

雑誌は、製本せず、原型のまま保存し、同一タイトルであればブックトラック1台分を出納する「大量出納サービス」を行っている。また、多摩図書館の開架雑誌用に50分類の「東京マガジンバンク雑誌分類表」(資料1)を作成し、利用の便を図っている。

特徴的な活動として「東京マガジンバンクカレッジ」を立ち上げ、講演会、セミナーなどを展開している。

イ　資料の収集整理

資料の多くは都立中央図書館新聞雑誌収集担当が収集整理を行っている。平成29年度予算は 4,161 万円であり、収集方針及び資料選定基準に則り、1タイトル1部収集している。

平成29年度末の収集雑誌は 5,768 誌で、購入が52%、寄贈が48%である。雑誌全体（すでに収集終了したもの含む）では、およそ3分の2が寄贈である。

収集中の雑誌の内、約1割は外国語雑誌で、各分野の代表的な雑誌を収集している。

収集中の雑誌を「日本十進分類法」で分類すると、全分野収集しているが、「3門（社会科学）」、次いで「5門（技術分野）」が多い。また、雑誌は多様な内容が掲載されており、総合誌など「日本十進分類法」では対応できないものがある。そのため、都立図書館では「日本十進分類法」以外に、独自の逐次刊行物用の分類「都立図書館逐次刊行物独自分類」（資料2）を使用しており、これによって分類されるものは、雑誌全体の1割以上を占める。

「日本十進分類法」及び「都立図書館逐次刊行物独自分類」を基本とした「東京マガジンバンク雑誌分類表」（50分類）では、「03（学術）」が最も多く、次いで「50（文学）」となっている。

雑誌の整理は、物理的な1冊単位で行っており、年間 72,500 冊のデータを作成している。およそ450誌については、株式会社図書館流通センターが作成する目次情報も登録しており、都立図書館蔵書検索において検索可能である。雑誌は原則として発売日当日に都立中央図書館に納品され、翌日には都立多摩図書館に到着し利用可能となる。

7　都立図書館が実施した各種調査結果について

都立図書館実施調査3種の概要を俯瞰し、雑誌に関する調査結果について分析を行った。なお、各調査の調査目的、方法、調査日等は、資料3のとおり。

「都立図書館利用実態・満足度調査」、「雑誌の大量利用に関するアンケート調査」は、都立多摩図書館の移転前後に行った平成27年度、平成29年度調査について比較を行った。（以下、平成27年度実施調査結果については「移転前」、平成29年度実施調査結果については「移転後」という。）

「都立図書館潜在利用意向調査」は、平成29年度に行った調査である。

（1）都立図書館利用実態・満足度調査について

ア　属性

性別は、女性の割合が22．6%から37．7%に増加し、各年代においても伸びた。

年齢層では、10代が11．9%から22．1%に増加した。

職業3分類（「有職」「学生」「無職」）では、学生の割合が、19．7%から29．7%へ増加した。

主婦の割合が増加し、5．8%から10．3%となった。

イ　利用した雑誌の分野

移転前・移転後どちらの調査でも「東京マガジンバンク雑誌分類表」のほとんどすべてにわたり幅広く利用されていた。

移転前後の開架（移転後は閲覧室と開架書庫の合算）について、利用分野の比較を行うと、利用が最も多いのは、2か年共に、「週刊誌・総合誌」、「ビジネス」である。また、移転後は「女性誌」、「アート」の利用割合が伸びている。

利用の多かった上記4分野の利用について、移転後について性別等のクロス集計を行った結果

は、次のとおり。

・「週刊誌・総合誌」 男性の利用が多く74．2％を占める。年代別では、70代の利用が最も多く、次いで60代、50代である。性別と年代別のクロス集計では、70代男性が23．3％と最も多い。職業3分類別では、無職男性が39．3％、有職男性が33．3％である。

・「ビジネス」 男性の利用が多く80％を占める。年代別では、70代の利用が最も多く、次いで60代、40代、50代。性別と年代別のクロス集計では、70代男性が20％と最も多い。職業3分類別では、有職男性が36．6％、無職男性が34．4％である。

・「女性誌」 女性の利用が多く、約85％を占める。年代別では、40代の利用が最も多く、次いで20代、10代。性別と年代別のクロス集計では、40代女性が19．4％と最も多い。職業3分類別では、有職女性が33．3％、学生女性が25％となっている。主婦女性の利用は22．2％を占める。

・「アート」 男性54．6％、女性43．2％で男性の方が多い。年代別では、10代と40代の利用が同数で最も多く、次いで50代、60代、20代。性別と年代別のクロス集計では、40代男性が18．2％と最も多く、10代女性が17．1％。職業3分類別では、有職男性が29．8％、学生女性が25％となっている。

ウ 蔵書に関する意見・要望

移転後では、「雑誌を増やして欲しい」「スポーツ誌を充実させて欲しい」「総合誌の種類を増やして欲しい」「考古学関連の地方誌や海外誌を増やして欲しい」があった。

(2) 雑誌の大量利用に関するアンケート調査

ア 属性

性別は、男性62％、女性38％と女性の割合が増加した。

年齢層では20代から60代まで同程度の割合であった。

職業では、「大学生、大学院生・専門学校生」「出版・報道・著述職」となっている。

居住地では、「都内市町村」(50．2％)が半数を占めるも、「都外」(27．8％)の利用も4分の1以上あり、目的意識を持って都立多摩図書館を訪れる利用者が多いことがわかる。

利用頻度では、「年に数回」と「今日はじめて」が多いのは変わらず、日常的に利用する層ではないと思われる。

イ 利用した雑誌の分野

移転前は「女性誌」「乗り物・交通・観光」の順であった。移転後は「女性誌」「総合誌」「スポーツ」の順であるが、どちらの調査でも「東京マガジンバンク雑誌分類表」のほとんどすべてにわたり幅広く利用されていた。

移転後では、開架の雑誌だけでなく、書庫内のバックナンバーが数多く利用されていることがわかった。また移転前と比較すると、20代や女性の割合が増加しており、移転を契機に「第25期東京都立図書館協議会」で提言された注力すべきターゲット層を中心に、より多くの利用者に認知されている。雑誌の蓄積が評価され、利用につながっていると捉えることができる。

> 東京マガジンバンクの特に注力すべきターゲット
>
> (ｱ)放送・新聞・広告関連や文筆業など「情報発信のプロフェッショナル」
>
> (ｲ)社会学、広告、マーケティング等を専攻する大学生
>
> 第 25 期 東京都立図書館協議会提言より抜粋

また同種の雑誌の複数タイトルを相互に比較することで、当時の流行の変遷や傾向を把握するといった利用も多く、多種多様な雑誌を収集する東京マガジンバンクならではの利用方法といえる。

ウ　蔵書に関する意見・要望

移転前後共に、欠号を補充してほしいとの意見があった。

また、移転後は、バックナンバーの充実、中央図書館と多摩図書館で所蔵が分散している雑誌についての意見が多くみられた。

(3)都立図書館潜在利用意向調査

「みなと区民まつり」(港区増上寺エリアで開催。以下「みなと」という。)、「国分寺まつり」(多摩図書館隣の都立武蔵国分寺公園で開催。以下「国分寺」という。)で行った調査である。

ア　属性

両調査共に、性別は女性が半数以上を占め、女性の割合が高い。

年齢層では、40代以上で7割以上を占める。

職業では、みなとは「在職中(自営業、会社員、公務員等)」が約5割を占める。国分寺は、「在職中(自営業、会社員、公務員等)」(42．3%)、「主婦(夫)」(30．6%)となっている。

居住地では、みなとが「港区」(40．1%)、「港区以外の23区」(35．8%)、「多摩地区」(2．4%)の順であり、国分寺では「国分寺市」(73．7%)が最も高く、「国分寺市以外の市町村」(17．6%)となっており、「23区」は2．0%である。

イ　興味関心がある雑誌の分野

両調査を合算し、都内在住者のみに絞り込み都民ニーズを検討した。

興味関心がある雑誌の分野としては、「食」が最も高く、次いで「女性誌」「週刊誌・総合誌」「アート(美術・音楽・映画等)」「趣味一般」となっている。「週刊誌・総合誌」は男性の全ての層で、「女性誌」は女性の全ての層で上位7位以内に入る。「ビジネス」は、男性の30代から50代で１位となっている。

平成29年度の「都立図書館利用実態・満足度調査」と比較すると、「食」の利用は閲覧室では10件　3．6%、開架書庫では2件　2．7%となっており多くはないが、「女性誌」「週刊誌・総合誌」「アート(美術・音楽・映画等)」は利用した雑誌分野上位5位以内に入っている。また、「週刊誌・総合誌」は、都立図書館利用実態・満足度調査でも男性の利用が多く、特に60代以上の利用の多さと興味関心の強さは合致する。「ビジネス」は、都立図書館利用実態・満足度調査でも男性の利用が多く、70代男性が最も多いが、40代から60代の利用も多い。「女性誌」は、都立図書館利用実態・満足度調査においても女性の利用が多い分野である。潜在利用意向調査、都立図書館利用実態・満足度調査共に、女性40代で「女性誌」が1位となっており合致する。

(4)まとめ

分析結果により、利用実態及び都民ニーズが高い分野は、「週刊誌・総合誌」「女性誌」「アート」となる。特に都民ニーズの高い「食」については、収集保存状況の確認及びPR等の対策等が必要である。

8　蔵書評価結果

当館が示した「質問事項」(資料4)に回答する形式にて、蔵書評価を実施した。また、その結果報告を都立図書館職員に対して行った。

評価事項に対する評価者からの主な意見は次のとおり。

(1)一般週刊誌及び総合誌の多様な収集・保存のあり方について

ア　平澤委員

・同種の雑誌を多様に収集提供することは、多角的な検討に資するため、また、中立性を保つためにも必要である。

・一般週刊誌及び総合誌は、事件、時代背景についての記事が大量に掲載され、各誌個別のスクープ記事、雑誌間の論争等もあり、情報の比較検討、相互比較のためには全て揃えた方がよい。網羅性に欠けると将来の調査研究に影響を及ぼす。また、消耗品ながらも大衆向けの娯楽要素が多く盛り込まれており、掲載内容から新たなテレビ番組が制作されるなど、文化を形成する一つとなっている。図書館が、これらを収集・保存しなければ、文化の損失に繋がる。

イ　川井委員

・テーマに沿った横断的な比較や時系列的な比較は、誰もが可能な研究方法であるため、多様な雑誌が必要である。

・一般週刊誌及び総合誌はジャーナリスティックな内容を含んでおり、調査研究上重要な資料と言える。雑誌は編集者の多様な視点で報道されるもので、同種複数誌の収集が必要である。

(2)東京マガジンバンクの重点テーマ(女性誌・鉄道誌)の収集・保存のあり方について

ア　平澤委員

・女性誌は日本の女性史研究・女性文化研究等において非常に重要であり、調査研究上複数の女性誌を比較検討することは必須と考える。また、女性は年代によって読む雑誌が変わる傾向がある。研究者の調査に対応し、かつ、利用者の要望に応えるためには、網羅的に収集する必要がある。

・外国の女性誌を多様に収集していることは、多摩図書館の特色が良く出ている。

・鉄道誌には、旅行・レジャー雑誌には記載されていない鉄道誌独特の地域情報やグラビア写真が掲載されており、これらは旅行番組や旅行記事を作るマスコミ関係者の新たな情報源となっている。また、同じ鉄道車両や路線に関する記事であっても、複数の鉄道関連雑誌を詳細に比較検討する利用者もいる。

イ　川井委員

・女性誌の各国版が揃っているのは貴重で評価できる。

(3)収集資料の提示方法について(開架での配置方法の工夫等)

ア　平澤委員

・独自の50分類は分かりやすく分類されている。

・女性誌など、対象年齢が分かれているものは対象年齢層別にまとめることが考えられる。

・外国人利用者獲得のため、洋雑誌のリストを日本語学校等に配布する、表紙を見えるように配架しビジュアルを目立たせる、来館者の学生の第二外国語学習に活用を促すなどの工夫が考えられる。

・利用者増のため、同分野内は利用が多い雑誌を上段に配架する、ビジュアル面で目立つ雑誌

を配架する、一緒に使用されることの多い雑誌が離れて配架されている場合は案内を付けるなどの工夫も検討してよいのではないか。

・雑誌リスト（パスファインダー）については、よくできていると思うが、追加の余地があるとすれば、どの雑誌の表紙に誰が載ったかなどのリストがあると面白いかもしれない。

・雑誌で「食」に関する雑誌や記事は非常に多く、明治・大正期の雑誌でも写真はなくても挿絵などを入れる例が多く見られる。「食」は表紙のビジュアル面を重視して配架するなどの工夫が考えられる。

イ　川井委員

・「オリンピック」を意識し、「スポーツと世界の地理情報」を入口近くに配架したことは、研究志向の図書館であるが現在の課題や興味関心にも対応していることを示している。

・女性誌の所蔵をアピールするならば、開架書庫にある『女性セブン』等の女性週刊誌、『たまごクラブ』等の育児誌を開架にするなどの工夫の必要性が見受けられた。

・開架書庫にある「地域情報誌」は、誌名の50音順に配架されているが、県名表示を行うことで利用しやすくなるのではないか。また、同分野の雑誌が開架書庫にある場合は、開架書庫にある旨の表示が開架に必要だと思われる。

・新聞広告を出稿する雑誌はある程度の部数が出版されていると想定され、開架の基準になるのではないかと思われる。

・例えば、雑誌リスト「旅行雑誌を探す」に、各地域で発行している「地域情報誌」を追加して紹介するなど、50分類を横断的にリストを作り「旅行」という観点からアピールすることも考えられる。

(4)収集の充実が望まれる分野について

ア　平澤委員

・全体的に見て、総合的に収書され過不足のない状態だと思う。

イ　川井委員

・フリーマガジン等、一般に入手困難な資料の収集も研究にとっては必要である。

(5)その他

ア　収集及び保存について

（ア）　平澤委員

・雑誌は継続して収集し保存することが最も大切で、それは図書館の力となる。

・現在の需要と未来の需要は異なり、未来の需要を正確に予測することは不可能である。雑誌は、入手期間が限定されており、後の入手困難性が高く、連載記事などは書籍化されない場合があり、時間の経過と共に歴史的な資料価値が付加されることが多い。都民全体に対するサービスであることから、幅広い分野の雑誌を収集することは当然であり、未来の利用者に対する責任だと考える。例えば、ポップカルチャーの歴史などは堅い雑誌だけでは分からないため、娯楽要素の強い雑誌など漫画雑誌も含めて幅広く収集保存すべきである。

・都立図書館が幅広い分野の雑誌を収書すると、「資料選定基準」が「具体性に欠ける」よう

に見えるのかもしれないが、国内有数の公立図書館である都立図書館が多くの雑誌を収集し、利用者が必要な時に提供出来る体制を維持することは、都民だけでなく国民全体にとっても有益なことだと考える。

・雑誌は世相を反映しており、リアルタイムの記録として残る。SNSもリアルタイムを記録するが、まとまった形では読みにくく、削除されて読めなくなる可能性もある。

・雑誌も国会図書館の納本制度の対象だが、納本されないものも多い。所蔵分担を行うのであれば、国会図書館、出版社、都立図書館等、関係者で調整する必要があると思われる。

（イ） 川井委員

・高度情報化社会において、図書館は情報収集のための中心となるインフラである。「新しいアイデアとは、既存の考えの新しい組み合わせ」であり、そのための情報提供は、本や雑誌、図書館の役割である。図書館の役割として、経済的な事情が許す限り利用が少ない分野の雑誌の収集・保存も継続すべきであり、それは都民に対するサービスである。幅広い収集の為には「資料選定基準」のような記述になるしかないと考える。

・予算減の場合は、都立多摩図書館の「東京マガジンバンク」という特性を考えると、図書の収集は他館でも行っているため、雑誌の収集を図書より優先し、その中でも一般週刊誌及び総合誌の収集を優先すべきと考える。

・背・造本など製本により失われる情報があるため、保存に際し製本をしていない事は重要である。特に雑誌は、現物を紙で閲覧することにより、表紙から時代の雰囲気が伝わる、同一誌の厚さなどの変遷が分かるといった効果があり、雑誌そのものを閲覧することは貴重である。

イ 欠号について

（ア） 平澤委員

・調査する年代の雑誌に1冊でも欠号がある場合、「該当期間中の雑誌を全て調査した」と報告や発表出来なくなる。これは研究者にとって致命的な問題である。そのため、可能であれば欠号部分は埋めた方が良いと考える。

（イ） 川井委員

・求める情報が欠号に掲載されていた場合、その情報は得ることができない。欠号は、研究上の大きな支障となる。

ウ デジタルマガジンについて

（ア） 平澤委員

・雑誌の読み放題サービスは維持コストもかかり、権利等の関係により表示されない記事もある。配信会社が撤退すればデータも消えてしまうため、雑誌データは配信会社が管理しているため、図書館の蔵書として組み込むことが難しいと考える。また、保存の観点からは未知数である。一方で、紙媒体は将来に残すことができる。

（イ） 川井委員

・情報を得るという観点では、収集する必要はあると考える。単なる情報なら、デジタル化された雑誌で閲覧することは十分だが、一方で物事を考えるという観点からは、紙資料が適

しており、保存性も高く、紙資料の収集も必要である。

・所蔵雑誌のデジタル化は経済的に可能ならば行っていただきたい。

エ　収集保存の検証について

（ア）　平澤委員

・未来の利用者のため利用の多寡で収集・保存を止めるべきではない。

・ニーズ調査は3－4年、具体的な雑誌収集の検証は10年程度が妥当と考える。なお、雑誌の休廃刊が多い中で、10年を超えて刊行されている雑誌は強みを持っている。

（イ）　川井委員

・短いスパンでの評価は近視眼的であると考える。

・図書館は情報収集のための中心となるインフラであり、貸出冊数や来館者数で図書館を評価するのは、高度情報化社会において疑問である。「求める情報にいかにアクセスできるか」が評価の最大ポイントになると思われ、そのためには可能な限り幅広い雑誌の収集を期待したい。また、評価指標として、レファレンスサービスは利用者の満足度を計ることができる。レファレンスサービスをもっとアピールして良いのではないか。

オ　その他

（ア）　平澤委員

・潜在的な新しい利用者が足を運びたくなるような、PR 活動がカギと思われる。

・雑誌の大量出納サービスなど、他の図書館では出来ないサービスを使えるのは、都立多摩図書館ならではと思う。

・雑誌記事検索のツールであるオンラインデータベース等は基本的なものは揃っている。

（イ）　川井委員

・OPAC の利用が難しい方もいるので、現状の様に手書き単票による出納依頼も必要である。

・ブックトラックによる大量出納は、出納の手間や時間を考えると利用者にとっては大変ありがたい。

・雑誌記事を検索する Web-OYA、各種新聞記事検索、事典系など各種オンラインデータベースやなども利用できるのは貴重である。

・インターネット情報の社会では、自分の関心や価値観と合致する情報としか接しない傾向があるが、今後はより本や雑誌の持つ情報の有効性がクローズアップされると思われる。図書館へ行き多様な雑誌を閲覧する事で、自分の関心や価値観外の情報との出会いが期待できる。

「東京マガジンバンク雑誌分類表」

資料1

注：枝番号は当該分類に内包される下位又は関連概念を示している。

雑誌分類	分類名辞　（注）	対応するNDC分類/G分類	内容補足
01	01_女性誌	589.2、593、G07	ファッション・ライフスタイル
02	02_情報科学・情報工学	007、549、G12	
03	03_学術・団体	002、060、063、G12	大学紀要一般を含む
04	04_博物館	069、G12、G77	
05	05_ジャーナリズム・雑誌・新聞	05、070	
06	06_図書館	010	
	06-1_図書館（一般・国立図書館・専門図書館）	016、018	
	06-2_図書館（公共図書館）	016	
	06-3_図書館（学校図書館・大学図書館）	017	
07	07_出版・書評・読書	019、02	
08	08_哲学・思想・倫理	13、14、15、309	
	08-1_哲学・思想・倫理・心理学（哲学・思想・倫理）	13、15、309	
	08-2_哲学・思想・倫理・心理学（心理学）	14	
09	09_宗教	16	
	09-1_宗教（一般）	16	
	09-2_宗教（仏教）	18	
	09-3_宗教（神道）	17	
	09-4_宗教（キリスト教）	19	
10	10_歴史	20	
	10-1_歴史（一般・世界）	20	
	10-2_歴史（日本）	21	
	10-3_歴史（系譜・人物）	28、G24	
11	11_地理・地図	29	
12	12_地域情報：日本	291	地域情報とは、地域の歴史・地理・文化に関する情報
13	13_地域情報：世界	29	
	13-1_地域情報：世界（世界）	290、302	
	13-2_地域情報：世界（アジア）	292、302.2	
	13-3_地域情報：世界（ヨーロッパ）	293、302.3	
	13-4_地域情報：世界（アフリカ）	294、302.4	
	13-5_地域情報：世界（アメリカ）	295、296、302.5、302.6	
	13-6_地域情報：世界（オセアニア）	297、302.7	
14	14_総合誌	302、G04、G06	
	14-1_総合誌（国内）	302.1、G04	
	14-2_総合誌（海外）	302	
15	15　政治・議会・人権・行政	31	
	15-1_政治（一般）	310、311	
	15-2_政治（議会）	314、315	
	15-3_政治（人権）	316	
	15-4_政治（行政）	317、318	
16	16_防災・警察・消防・都市政策	317.7、318.7、369.3	
17	17_外交・安全保障	319、39	
18	18_法律	32	
	18-1_法律（一般）	321	
	18-2_法律（公法）	323、326、329	
	18-3_法律（私法）	324、325、	
	18-4_法律（判例）	320.9	
19	19_経済学	33	
	19-1_経済学・資源（経済学）	331	
	19-2_経済学・資源（人口・土地・資源）	334	
20	20_経営・ビジネス	335、336	
21	21_サービス業・広告	673.9、674	
	21-1_商業・流通・広告（商業・貿易・流通・サービス業）	670、673.9、675、678	
	21-2_商業・流通・広告（デザイン・広告）	674	
22	22_財政・金融	338、34	
	22-1_財政・金融（財政）	34	
	22-2_財政・金融（金融）	338	
23	23_社会・文化・民俗	361、38	

24	24_労働		366	
		24-1_労働	366	
		24-2_労働(労働安全衛生)	366.9	
25	25_家族・子育て・男性・女性		367、369.4、376、599	
26	26_男性誌		589.2、593、G05	ファッション・ライフスタイル
27	27_社会保障・福祉・ボランティア		364、369	
28	28_生活・くらし・道具		365、590、593、597	
29	29_教育		37	
30	30_自然科学		40	
		30-1_自然科学(一般)	40	
		30-2_自然科学(数学)	41	
		30-3_自然科学(物理学)	42	
		30-4_自然科学(化学)	43	
		30-5_自然科学(生物)	46	
		30-6_自然科学(天文・地球科学)	45	
31	31_医学・健康		49	
		31-1_医学・健康(一般)	491	
		31-2_医学・健康(看護)	492.9	
		31-3_医学・健康(薬学)	499	
32	32_技術・工学		50	
		32-1_技術・工学(一般)	501	
		32-2_技術・工学(エネルギー)	501.6	
33	33_土木工学		51	
		33-1_土木工学(一般)	510	
		33-2_土木工学(上下水道)	518	
		33-3_土木工学(都市工学・公園緑地)	519、629	
34	34_環境		519、519.8	
35	35_建築・住宅		52、527	
		35-1_建築・住宅(建築)	52	
		35-2_建築・住宅(住宅)	527	
36	36_機械・電気・金属工学		53、54、56	
		36-1_機械工学・電気工学・金属工学(機械)	53	
		36-2_機械工学・電気工学・金属工学(電気)	54	
		36-3_機械工学・電気工学・金属工学(金属・鉱山)	56	
		36-4_機械工学・電気工学・金属工学(石油・ガス)	568	
37	37_製造工業・化学工業		57、58	
		37-1_製造工業・化学工業(製造工業・ものづくり)	58	
		37-2_製造工業・化学工業(化学工業)	57	
38	38_食		383.8、498.5、588、596	
		38-1_食(食文化)	383.8	
		38-2_食(栄養)	498.5	
		38-3_食(料理・食べもの)	596	
		38-4_食(食品産業)	588	
39	39_産業		60	
		39-1_産業(一般・産業政策)	60	
		39-2_産業(農林水産業)	61、65、66	
		39-3_産業(園芸・野菜果物)	62	
		39-4_産業(畜産・飼育)	64	
		39-5_産業(水産業)	66	
40	40_乗物・交通・観光		68	
		40-1_乗物・交通・観光(一般)	536、680、	
		40-2_乗物・交通・観光(船舶)	550、557、683	
		40-3_乗物・交通・観光(自動車)	537、685	
		40-4_乗物・交通・観光(鉄道)	536、686	
		40-5_乗物・交通・観光(航空)	538、557、687	
		40-6_乗物・交通・観光(観光・旅)	689	
41	41_通信・放送・郵便		69	
		41-1_通信・放送・郵便(通信)	547、694	
		41-2_通信・放送・郵便(放送)	699	
		41-3_通信・放送・郵便(郵便)	693	
		41-4_通信・放送・郵便(映像・音響)	547.7、547.8	

42	42_芸術・美術一般		70	
43	43_美術		70	
		43-1_美術(絵画・彫刻・書道・版画・工芸)(彫刻) 43-2_美術(絵画・彫刻・書道・版画・工芸)(絵画) 43-3_美術(絵画・彫刻・書道・版画・工芸)(書道) 43-4_美術(絵画・彫刻・書道・版画・工芸)(版画) 43-5_美術(絵画・彫刻・書道・版画・工芸)(工芸)	71 72 728 73 75	
44	44_写真・印刷		74、749	
45	45_音楽		76	
		45-1_音楽(一般) 45-2_音楽(器楽) 45-3_音楽(軽音楽・ダンス音楽・ジャズ・ロック) 45-4_音楽(声楽・歌劇) 45-5_音楽(邦楽) 45-6_音楽(舞踊)	760 763 764、764.7 766、767 768 769	
46	46_映画・演劇		77	
		46-1_映画・演劇(演劇・演芸・芸能一般) 46-2_映画・演劇(歌舞伎・能・狂言) 46-3_映画・演劇(映画)	770、771、772、779 773、774 778	
47	47_諸芸		79	茶道・華道・囲碁・将棋等
48	48_言語		80	
49	49_文学・文芸		90、G17	
		49-1_文学・文芸(一般・海外) 49-2_文学・文芸(日本文学)	90、92～99 91	
50	50_スポーツ		78	
		50-1_スポーツ(一般・陸上競技) 50-2_スポーツ(球技) 50-3_スポーツ(冬季競技・水上競技・アウトドア・釣り) 50-4_スポーツ(相撲・競馬・武術・射撃)	780、781、782 783 784、785、786、787 788、789	

「都立図書館逐次刊行物独自分類表」

G00　外国語新聞	G19　蔵書目録	G50　都区市町村広報
G01　全国紙	G20　用語集	G51　都区市町村議会報
G02　地方紙	G21　団体名簿	G52　都区市町村公報
G03　幕末・明治・大正の新聞	G22　新聞切り抜き	G53　都区市町村議会会議録
G04　総合誌	G23　人名録	G54　都区市町村議会委員会速記録
G05　読物一般	G24　個人伝記	G55　都区市町村決算書・予算書
G06　一般週刊誌	G25　政党機関誌・紙	G70　図書館協会
G07　女性誌・紙	G26　法令集・判例集	G71　国立図書館
G08　児童雑誌・紙	G27　諸法	G72　県立図書館
G09　グラフ誌・紙	G28　官公報	G73　都立図書館
G10　PR誌・紙	G29　国会会議録	G74　市町村立図書館
G11　点字誌・紙	G30　各種統計	G75　大学図書館
G12　紀要	G31　世論調査	G76　専門図書館
G13　情報誌	G32　市民運動	G77　博物館
G14　書評専門誌・紙	G33　企業技術報告	G78　外国友好協会
G15　出版物情報	G34　企業名鑑	G79　美術館・展覧会
G16　出版関係PR誌・紙	G35　写真集	
G17　文芸雑誌・紙	G36　コレクション	
G18　主題書誌		

都立図書館実施調査の概要について

	都立図書館利用実態・満足度調査		雑誌の大量利用に関するアンケート調査		都立図書館潜在利用意向調査	
	27 年度	29 年度	27 年度	29 年度	29 年度	
					みなと区民まつり	国分寺まつり
調査目的	都立多摩図書館の来館利用者に対し、図書館サービスなどについて満足度や意向を集計分析し、今後の図書館運営の参考とする		都立多摩図書館の来館利用者のうち、雑誌を大量に利用する方の目的や利用傾向を把握し、今後の東京マガジンバンクのサービス改善の参考とする		都立図書館のブースに立ち寄った来場者に対して、都立図書館の認知状況や利用状況、東京マガジンバンクの認知・利用状況等を把握する	
調査方法	図書館出入り口付近にて、入館時に調査票及び筆記具を配布し、退館時に回収		資料出納時に資料とともにアンケート用紙を手渡し、資料返却時に回収。回収時にインタビューの可否を確認し、承諾した人に、回収内容を基に、司書が聞き取り調査を実施		アンケート調査への協力依頼に承諾した対象者に調査票を配布し回収	
調査実施場所	都立多摩図書館 ※同様の調査を都立中央図書館でも実施		都立多摩図書館		第 36 回みなと区民まつりに出展したブース	第 34 回国分寺まつり当日に多摩図書館に隣接する遊歩道に設営したブース
調査日	平成 28 年 1 月 20 日(水) 1 月 24 日(日) 1 月 25 日(月)	平成 29 年 11 月 15 日(水) 11 月 19 日(日) 11 月 20 日(月)	平成 28 年 2 月 1 日(月)～ 6 月 30 日(木)	平成 29 年 11 月 25 日(土)～ 平成 30 年 3 月 15 日(木)	平成 29 年 10 月 7 日(土) 10 月 8 日(日)	平成 29 年 11 月 5 日(日)
調査対象	図書館来館利用者		書庫内の雑誌を大量(※)に出納・閲覧した利用者 ※①同一タイトルを連続して 1 年分以上(週刊誌は 3 か月以上) ※②同一タイトルをとびとびに 10 冊以上		都立図書館のブースに立ち寄りアンケート調査への協力依頼に承諾した人	
回収数	345 票	1,248 票	297 票(内聞取り 178 票)	326 票(内聞取り 180 票)	1,075 票	697 票
回収率	93.2%	87.4%	42.2%(内聞取り 59.9%)	77.3%(内聞取り 55.2%)	97.6%	81.8%
設問概要	回答者属性(性別、年齢、職業、居住地、勤務地、利用頻度)、利用目的、利用サービス、目的達成度、重要度、満足度ほか		回答者属性(性別、年齢、職業、居住地、勤務地、利用頻度)、利用目的、利用した雑誌タイトル、記事検索データベースの利用、意見・要望		回答者属性(性別、年齢、職業、居住地)、ブース評価、都立図書館の認知度、利用経験、利用意向、東京マガジンバンク利用意向、興味関心のある雑誌分野ほか	

平成29・30年度蔵書評価　質問事項

1　開架及び開架書庫について

(1) 東京マガジンバンクにおいて、不足しているテーマや資料がないか、ご意見をお聞かせください。

(2) 50分類別に配架をしていますが、配架のあり方についてご意見をお聞かせください。

(3) 洋雑誌に関して、不足しているテーマや資料、配架の方法についてご意見をお聞かせください。

(4) 開架書庫の雑誌の中から、開架にあった方がよいと思われる雑誌がありましたら、その理由も含めてお聞かせください。

2　特定ジャンルの雑誌について

(1) 女性誌について伺います。

提供／研究のそれぞれのご経験から、どのような使用方法があるかお聞かせください。例えば、複数の雑誌を比較検討することは、利用方法としてよくあることでしょうか。

(2) 鉄道関連雑誌について伺います。

提供／研究のそれぞれのご経験から、どのような使用方法があるかお聞かせください。例えば、複数の雑誌を比較検討することは、利用方法としてよくあることでしょうか。

(3) 一般週刊誌及び総合誌について伺います。

提供／研究のそれぞれのご経験から、どのような使用方法があるかお聞かせください。例えば、複数の雑誌を比較検討することは、利用方法としてよくあることでしょうか。

(4) 学術誌以外の雑誌について伺います。

提供／研究のそれぞれのご経験から、調査研究上どのような使用方法があるかお聞かせください。

3　雑誌の利用について

(1) 都立図書館の実施した調査では、分野により利用の多寡はありますが、50分類いずれについても利用がありました。このことについて、どのようにお考えでしょうか。特に利用の少ない分野の雑誌の収集・保存について、ご意見をお聞かせください。

(2) 都立図書館の実施した調査によると、所蔵している雑誌の中には、現時点で利用の少ないものもあります。こういった雑誌を都民の方に活用していただくために、どのような周知の方法が有効と思われますか。また、多摩図書館の移転後は入館者数も増加しましたが、更に多くの方に雑誌を利用いただくために、新規の利用者獲得に際し、PR のポイントとなる点はどのようなことと思われますか。例えば、所蔵タイトル数や所蔵分野の幅広さ、所蔵範囲（古い雑誌を所蔵していること）は、訴求力がありますでしょうか。

(3) 広報等にも関わらず利用が少ない雑誌については、収集・保存の見直しの検討を行っていく可能性があることについて、ご意見をお聞かせください。

(4) 利用者が自ら雑誌を探すことができるよう、別紙のようなパスファインダー（雑誌リスト）を作成しています。このリストについて、不足しているテーマや工夫の余地など、ご意見をお聞かせください。

(5)都立図書館では、現在記事検索を経由して雑誌の出納ができるようになっています。今後、雑誌の利用の際にどのような機能があったらよいと思われますか。
(6)都立図書館で提供している雑誌関連のデータベースについて、他にあるとよいと思われるデータベースがありましたら、ご意見をお聞かせください。
(7)図書館における、雑誌の読み放題サービスをはじめとするデジタル雑誌の提供や、所蔵雑誌のデジタル画像での提供について、ご意見をお聞かせください。また、これらを調査研究に使用する場合、図書館での(紙媒体の)雑誌の収集・保存にどのような影響があると思われますか。

4 雑誌へのニーズについて

(1)「大量利用に関するアンケート及び聞き取り調査」では、欠号に関するご意見がありました。提供／研究のそれぞれの経験から、欠号の影響についてお聞かせください。
(2)「潜在利用意向調査」では、いずれの分野についてもニーズが見られました。この結果について、どのようにお考えでしょうか。
(3)「潜在利用意向調査」では、「食」に関するニーズが高い結果となりました。「食」と一言で表現されるものは幅広いですが、どのような内容を想像されますか。

5 今後の展望について

(1)雑誌の収集にとって大切と感じていることがありましたら、ご意見をお聞かせください。
(2)「平成27年度包括外部監査」では、現行の「資料選定基準」について、「具体性に欠ける」と言われています。このことについて「資料選定基準」全般も含め、ご意見をお聞かせください。
(3)「平成27年度包括外部監査」での、「数年間という周期の一定頻度で、図書館の利用者以外を含む様々な都民のニーズを客観的に幅広く調査・分析」という指摘に関し、どの程度の周期が適当と考えられるでしょうか。
(4)雑誌の保存について、大切に感じていることがありましたら、ご意見をお聞かせください。
(5)雑誌の休廃刊が多くなっていますが、紙媒体としての雑誌の今後、デジタル雑誌や電子ジャーナルなどの電子媒体としての雑誌の今後について、感じていらっしゃることがありましたらお聞かせください。

6 その他、蔵書や全体のレイアウト、利用者へのご案内を含めた全般についてお気づきの点やご感想などありましたらお聞かせください。